

# 私学の魂

静岡聖光学院中学校・高等学校

「21stCEO (21世紀型教育機構)」への加盟をバネに世界標準の教育プログラムを導入し、新たな学習環境を整え、この2~3年の間に、男子校では最も劇的な進化を遂げて“静岡から日本の教育を変える”存在となった男子進学校。

ローマに本部をおき、現在は世界 22ヶ国で教育活動を行うキリスト教教育修士会 (1819年、ジャン・マリー・ド・ラメネと3人の青年修道士によって創立) によって、1969 (昭和 44) 年に設立された静岡聖光学院。国内の姉妹校には横浜の聖光学院や東京のセントメリーズスクールがあります。カトリックの世界観にのっとり、人格の尊厳と愛の精神を高く標榜し、普遍的な人間愛をめざす理念を掲げ、中高6年間一貫教育を行う私立男子校として50年の歴史を刻んできた同校は、2017 (平成 29) 年の「21stCEO (21世紀型教育機構)」加盟を契機に、この2~3年の間に21世紀型教育のプログラムと学習環境を劇的に進化させつつあります。今回は、その一連の改革を教頭~副校長~校長として、同校の先生方との歩みを進めてきた、4月から校長2年目を迎えた星野明宏先生にお話を伺いました。



校長 星野 明宏先生

## DATA 1

### 静岡聖光学院中学校・高等学校

沿革	1969 (昭和 44) 年 4月	静岡聖光学院中学校開校 (初代校長ピエール・ロバート)。
	1969 (昭和 44) 年 10月	生徒寮フワイエ完成。
	1972 (昭和 47) 年 4月	静岡聖光学院高等学校開校。
	2015 (平成 27) 年 3月	人工芝テニスコート完成。
	2017 (平成 29) 年 3月	人工芝グラウンド R. マーテルフィールド完成。
	2018 (平成 30) 年 3月	50周年記念事業 新職員室完成。
	2018 (平成 30) 年 5月	50周年記念事業 SCL (図書室) 完成。
	2018 (平成 30) 年 8月	50周年記念事業 全校舎塗装・教室壁ガラス張り改修工事完成。
	2018 (平成 30) 年 8月	50周年記念事業 バイオリソトープ完成。
	2018 (平成 30) 年 8月	R. マーテルフィールド 夜間照明設備の設置 (地域の方々向け)。
	2018 (平成 30) 年 9月	50周年記念事業 ピエールロバートホール完成 (旧階段教室)。
	2019 (平成 31) 年 3月	50周年記念事業 英語教室 EAL 完成。
	2019 (平成 31) 年 4月	校長職を岡村壽夫から星野明宏に交代。
	2020 (令和 2) 年 2月	デジタル工房 BIGIRION GARAGE 完成。
	2020 (令和 2) 年 3月	新体育館 Trinity arena 完成。

校長 星野 明宏

所在地 〒422-8021 静岡県静岡市駿河区小鹿 1440

TEL: 054-285-9136 (代表)

<http://www.s-seiko.ed.jp/>

交通 JR静岡駅北口 [8] 番より「大谷」または「静岡大学」行き。所要 20分バス停『小鹿公民館前』下車、徒歩 15分。JR静岡駅南口 (新幹線側) よりタクシーで 15分。JR東静岡駅南口よりタクシーで 10分。

## 創立 50 周年を未来への転機と考え “静岡から日本の教育を変える” 確固たる意思とメッセージを発信！

今回は、この1～2年の間に、様々な学習プログラムを導入し、同時に新たな教育環境を整え、生徒の主体性を生かす「21世紀型教育」実践校として、首都圏の男子校のなかで最も急速に“進化”した、静岡聖光学院中学校・高等学校校長の星野明宏先生にお話を伺います。

まず、静岡聖光学院という学校の教育理念と、創立からこれまでに培ってきた校風や学校のあり方についてお聞きします。

「本校は、カトリック系の男子校として、この静岡の地に創立され、50年の歴史を刻んできました。写真は生徒がドローンで空撮した本校の全景ですが、前に駿河湾、後ろに富士山という風光明媚な立地にあります。

この自然の景観に囲まれた教育環境で、初代校長ピエール・ロバート先生による、勉強にも部活にも研究にも力を入れるという創立の理念のもと、在校生の3割が暮らす寮もある学校として、独自の校風を生み育ててきました」と星野先生。

確かに東京や神奈川の都心部にはない、穏やかな空気が静岡聖光学院のキャンパスには流れています。

「ただし、静岡は東京や神奈川と違って公立志向が強く、私立中学受験をする小学生は多くない土地です。ですから本校が、県内に数少ない私立の中高一貫校として、世界に通じる新たな教育に取り組み“静岡から日本の教育を変える！”という意思とメッセージを発信したいと、創立50周年を機に考えたのです。

現在の学院長の岡村壽夫先生は、この静岡聖光学院の卒業生でもあり、初代校長ピエール・ロバート先生の教え子でもあります。その岡村先生が校長在任時代



生徒がドローンで撮影したという静岡聖光学院のキャンパス全景。この写真上方には駿河湾、下方には富士山が見える風光明媚な立地にある。

に、ちょうど創立50周年を迎え、学校全体で未来につながる本校の新たな教育を形作りたいと考えたことが、この2～3年の進化のきっかけになりました。

その旗振り役を、当時副校長だった私に託してくれたことで、この間の本校の進化の歩みを、マネージャーとして本校の教師陣とともに進めてきました」と星野先生は、この2～3年間の静岡聖光学院の急速な“進化”の経緯を話してくれました。

この機に静岡聖光学院が、世界標準の「21世紀型スキル」を育てる学校をめざす私立中高の有志によって組織された「21stCEO（21世紀型教育機構）」に加盟したことも、同校の劇的な進化を促す、ひとつのきっかけになったように思えます。

「未来につながる本校の教育のスタイルを様々に模索しているときに、「21stCEO」加盟校の先生方と知己を得て、“これだ！”と思いました。とくに県内では圧倒的な人気を集める県立静岡高校をはじめ県立志向の強い静岡県にあって、これまでの日本の学校にはなかった新たな教育スタイルを打ち出すことで、静岡の教育に新風を吹き込むと同時に、“静岡から日本の教育を変える”というメッセージを発信することにもつながると考えました」と星野先生。

たとえば、2015年の共学化からこれまでの6年間で、年々人気と評価を高めてきた三田国際学園に象徴される「21stCEO」加盟校が掲げる「21世紀型教育」といわれる新たな教育は、数年前までは多くの小学生の保護者にとって聞きなれない言葉でしたが、年々若い世代の保護者から支持されるようになってきています。

「これからの中高生が生きる未来は、私たち大人が生きてきた世界とは違ったものになることは明らかです。その時代は果たしてどのような歴史や文化を持ち、世界の仕組みはどうなっているのか、その時代のなかで、どう自己実現していくのか、個から発信する力はますます求められています。予測不能の変化にも主体的に向き合い、自分の力で道を切り拓いていける、そんなたくましい自分軸を持つことが必要になっています。だからこそ、本校では生徒にも教員にも自由に、『自分の考えを持って』この静岡聖光学院という学び舎で学校生活を謳歌してほしいと思っています」と星野先生。

## 「日本一短い練習時間」でも 花園（全国大会）出場を実現した ラグビー部員の主体性の発揮！

では、静岡聖光学院の“主体的な学び”とはどのようなもので、生徒たちはどのようなスタンスで、“自分の考えを持って”活動や発信をしているのでしょうか。

「本校では、生徒には“主体的に”学び、自由に学校生活を形作って、中高6年間の学校生活を充実したものにしていってほしいと願っています」という星野先生。“主体的に学ぶ”とはどういうことでしょうか。

ここで星野先生は、同校ラグビー部の顧問時代に「(10年前から)日本一少ない練習時間で花園(全国大会)出場を果たした」同校ラグビー部員に投げかけた課題を例に説明してくれました。

「幸いなことに、今回は本校のスピーディーな進化を評価していただいています。私が教師陣とともに歩んできたなかで心がけてきたのは“主体性とマインドセット”ということに尽きると思っています。

たとえば本校は創立時から伝統的に部活動は週3日、火・木・土の90分間、冬場の11月～1月は60分間で、ちょうどラグビーのシーズンはこの冬場にあたるため、必然的に大会直前は60分の練習時間で全国大会出場をめざすことになります。

そこで私が当時ラグビー部員に足りない点を克服するために課したのは、①勝負所で弱い→「成し遂げる」「1本目がベスト」に!、②60分しか練習できない→61分やったらぶっ倒れる練習を!、③アップの時間が足りない→校舎を出たところからアップ開始!、④ダッシュ練習する時間がない→笛がなったらダッシュで集合!、⑤話し合う時間がない→水入れの時間はミーティングタイム、⑥意識レベルの統一がない→練習の開始時は必ず10分意思統一ミーティングを!(何となくの60分より意思統一の50分)、ということでした」と星野先生は当時を振り返ります。

「まず、勝負強さを培うために『(練習を)重ねて最後にできる』『(試合で)最後に逆転できる』ではなく、『1本目からベストを出し切る』練習を意識しました。

次に、60分という練習時間の短さを補うために、もし61分やったら倒れるくらい密度の濃い練習を心がけるようにしました。

そして、アップの時間が取れないならば、着替えて校舎からグラウンドに出たところからアップが始まっているという意識を持つように、また、ラグビーという競技には不可欠のダッシュ練習の時間がとれなければ、練習中に指示や助言を受けるための笛が鳴ったら全力ダッシュで集まるよう徹底しました。これで60分の練習でも7～10回のダッシュ練習に等しくなりました。

さらに、選手同士で話し合う時間が足りないなら、水入れ時間(水分補給タイム)の1分間をミーティングタイムと位置づけ、この間に話し合う習慣をつけました。そして、意識レベルの統一がない、という課題を克服するため、60分の短い練習時間であっても、

必ず最初の10分間は、意思統一のためのミーティング時間としました。毎回何となく60分の練習をするよりも、意思統一をする10分間を割いてホワイトボードなども使ってチームの課題や練習の意味を確認し、残り50分の練習の密度を濃くした方が効果は大きいと考えたからです」と星野先生は説明してくれました。

これは当時の静岡聖光学院ラグビー部が自らに課した課題ですが、中高での学習や、試験勉強にも通じるものだと星野先生は考えているといいます。

「下の図でお伝えするならば、右のような段階で表せるのではないかと考えました。

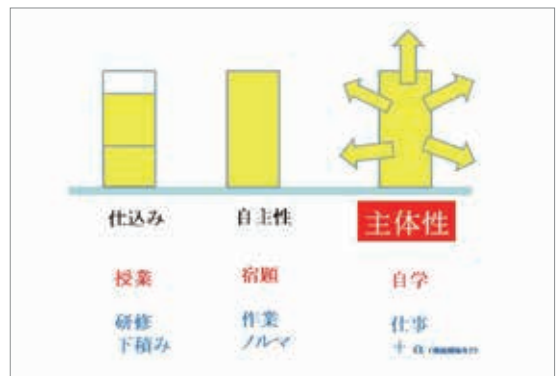
左の『仕込み』は、受け身で何かを習得する段階です。一方的な講義型の授業はこれに相当します。

次に真ん中の『自主性』を持ってると、大人や指導者がいなくても、自らの意思や工夫によって効果的な時間の使い方ができるようになります。限られた時間で宿題をきちんとやるというのも、この段階です。

そして右側の『主体性』を発揮できる段階になると、もう一段階上をめざす課題を自ら設定し、与えられた課題以上のプラスアルファの成果を出せるよう、自由に創造的な発想をするようになります。これは仕事でも同様ですよ。新規開拓などには、クリエイティブな発想や、デザイン思考的な考え方が求められます。

正直なところ、私がラグビー部の顧問として指導をしていたときにできたのは、このなかの『自主性』止まりでした。しかし、私の後任の現在の顧問は、部員が自分たちで話し合う習慣を育み、『主体性』を発揮できるころまで導き育てていると思います」と星野先生。

「日本一短い練習時間」にも関わらず、10年前から花園出場を実現してきた静岡聖光学院ラグビー部ですが、かつては全国大会で勝つことができませんでした。しかし選手(部員)たちが「主体性」を持って努力と



星野先生が考える「仕込み」～「自主性」～「主体性」の図。「主体性」を発揮できるようになると、教員が意図した範囲を超えて積極的な活動に取り組み、大きな成果を発揮できるという。

工夫を重ねてきた結果、昨年はいよいよ格上の強豪校に初めて勝つことができました。

そして一昨年、学校教育の現場でも課題とされている「部活の時短」問題の、ひとつの実現モデルケースとして、鈴木大地スポーツ庁長官が、静岡聖光学院を視察に訪れました。この「部活の時短」という課題は、「教員の働き方改革」と背中合わせでもあり、同校の部活のあり方が、今後の日本の学校教育における「部活」のあり方の、ひとつのヒントとなっていくかもしれません。

## 生徒が主体性を発揮して企画し、実現された、「部活動サミット」と日本初の「国際未来共創サミット」

星野先生が話してくれたように、「主体性」を育てることを大切にしてきた静岡聖光学院の教育環境で学んできた生徒たちは、いま様々な場面で、自ら考え、発信し、「主体性」を発揮しつつあります。

その一例として、2018年9月には、ラグビー部、サッカー部などが先頭に立ち、県内の学校やクラブチームを中心に、全国の学校の有志を集めての「部活動サミット」を実現したのです。そこで必要になる費用も、クラウドファンディングで、自ら同サミットのコンセプトと意義を発信して多くの共感と協力を得て、目標の100万円を集めることに成功しました。

こうして同校の生徒は、「部活」が抱える課題でも、みごとに「主体性」を発揮しています。



静岡聖光学院の生徒が主体性を発揮し、実現した『部活動サミット』。必要な費用も自らクラウドファンディングで集めた！

「その後、学内の有志によって立ち上げられた『国際サミット委員会』によって、世界の中高生による『国際サミット』が企画され、昨年8月から9月にかけては、アジアからの参加7か国の高校生による第1回『国際未来共創サミット』が実現しました。SDGsグローバルゴールの一つであるゴミ問題について議論し、解決策を共に探り、プレゼンするという一連の活動が、日本で初めて、この静岡を舞台に生徒主導で実現するに至りました」と星野先生。

幸運なことに、私たち「私学の魂」編集部メンバーも、昨年9月1日に同校で行われた「21stCEO」主催セミナーのメインプログラムとして、この世界の高校生による『国際未来共創サミット』の様子を取材させていただくことができました。



2019年8月～9月にかけて静岡聖光学院のキャンパスと寮を拠点として実現した第1回『国際未来共創サミット』の様子。アジア7か国から集まった高校生が、みごとに集合知を形成して“未来への希望”を感じさせてくれた！

いま、世界と地球環境が抱える大きな問題を、これから自分たちが生きる未来の社会の課題としてとらえ、世界の高校生同士で様々な立場や考えを伝え、話し合い、共に解決策を探っていく試みと、その貴重な集いの機会を大切に、互いを尊重し理解し合いながらも白熱した議論を重ねる若者の姿には、“未来への希望”さえ感じさせられました。

「主体性をもつという目標や価値観を得て、『自分たちで自由に考え、実行しても良いんだ!』という感覚を育んだ生徒たちは、次第に、“自由に”、“主体的に”行動するようになります。これがいまの本校の底流に流れる空気ようになってきたことが、生徒の成長と、学校全体の急速な“進化”に結びついているように思います」と星野先生。

「まだまだ進化の発展途上にあり、日々学ぶことばかりですが…」と星野先生は謙遜しますが、私たちの目から見ても、静岡聖光学院の生徒たちのダイナミックな活動と成長ぶり、学校としての急速な進化には目を見張られます。“静岡から日本の教育を変える!”ことは決して実現不可能なものではなく、同校から発せられたそのメッセージには、確固たる意思と覚悟があることも、ひしひしと伝わってきます。

## 創立 50 周年プロジェクトを機に、 理想の学習環境を次々に整備し、 従来の学校にない自由な学びを!

こうして、生徒の「主体性」を育て、自由な活動を後押ししてきた静岡聖光学院ですが、そこには先生方の意識改革も必要だったのではないかと思います。

「もともと本校には、初代校長ピエール・ロバート先生が掲げた理念のもと、創立以来そういう文化が受け継がれていました。ですから、私たちはいまの学校の変化を“改革”とは言わず、“進化”と呼んでいます。ただ、生徒の主体性を育てるには、まず私たち教員が主体性を持つ必要があることを意識共有しました。

創立 50 周年プロジェクトが始動するときに『Mind set』をテーマに掲げ、先生方に伝えたのは、これからの本校の教育をソフト面で考えるときに『延長線上ではなく、“理想×未来の予想”で』考え、教育環境をハード面で考えるときは、『予算ありきではなく“理想×未来の予想”で』考えていこうよ、ということでした。まず何百億円かかったとしても、まず理想から考え、そこから現状と予算でできることに落とし込んでいく



2018年5月に完成したSCL (Seiko Culture Lab) と呼ばれる図書室。初めて訪れたときには驚かされたほどの素晴らしい室内デザインと居心地の良さ。卒業生でコーヒーハンター川島良彰氏プロデュースの1杯100円の美味しいコーヒーを飲みながら「自ら学ぶ」ことができる!

という考え方です。これはほとんど手探りの、先生方にとって、いわば『PBL(プロジェクト・ベースド・ラーニング)』だったと思います」と星野先生は、同校が掲げた理想と未来づくりの考え方を話してくれました。

「副校長 4年目の私とそのプロジェクトリーダーに任じられた際にマネージャーとしてしたことは、ひたすら『1 on 1』で先生方と話し合い、それぞれの先生方の『特長』を探すことと、校務分掌とは別に、プロジェクトベースで学校組織の課題を発見し、解決の道を探っていくことでした。理想に向けて、学校が抱える課題が50個から100個あるとしたら、それぞれの課題について同時多発的に多くのプロジェクトが発生して良いと考え、『校舎プロジェクト』や『図書館プロジェクト』などを立ち上げてもらい、解決の道筋が立つと消滅させるという繰り返しでした」と星野先生はいいます。

そうした考え方とプロジェクトによって、2017年から2019年の3年の間に、次々と新たな教育環境を整えていきました。

「新たな学習環境を整えるための校舎プロジェクトでは、アメリカのデザイナーの意見も求め、『日本の既存の学校の教育環境や学習スタイルは堅苦しく、遅れているのでは?』という耳の痛い批評も受け止めました。

写真は『透明度のある学校』をテーマに改装した、教室と廊下、『立っても座ってもディスカッションやPBLができる』ようにしたCL(Creative Lab)と呼んでいるアクティブラーニングルームの風景です。そのほかにも、すべての場面で、生徒が自由に、ある意味では勝手に使いこなすことができるような環境・施設づくりを意識しました」と星野先生。

「象徴的なのが、2018(平成30)年5月に完成したSCL(Seiko Culture Lab)と呼んでいる図書室です。ここは、従来の図書室の概念にとらわれず、生徒が勝手に来たくくなるような環境をという発想で設計されました。『これなら生徒は来たくやるよね!』と…。そして1杯100円で美味しいコーヒーも飲むことができるようにしたところ、高校生はもちろん中学生にも好評で、いまでは中学1年生もスターバックスで学ぶ大学生みたいに、ちょっと格好つけて(笑)コーヒー片手に自習しています」と星野先生は笑いながら紹介してくれました。

ちなみにこのSCLの室内デザインの素晴らしさと居心地の良さは抜群ですし、コーヒーは本当に美味しいので、学校見学の際に機会があれば、ぜひ保護者にも試飲してみてください。

「そしてこの図書室SCLには、司書資格を持つ教員とは別に、理科が専門の教員が『店長』に任命されていて、この店長が勝手に(=自由に)店内のデコレーシ



初代校長の名を冠した『Pierre Robert Hall』で鍛えたプレゼンテーションスキルで「TED 浜松」に出場し、大人に負けないプレゼンを見せてくれた静岡聖光学院生!

ンを工夫して、自身の専門の研究分野である鉱石の化石などを、これも勝手に(=自由に)県内の博物館と交渉して借り出して展示などを行っています。ほかにも、このSCLでは、プロのクラリネット奏者でもある本校音楽科教員による演奏会が自主開催されたりしています」と説明してくれました。

## 生徒が自由に、主体的に学べる、 新たな学習空間の創造・整備が 生徒の発想・企画・実行力を育てる!

「そのほかにも、老朽化していた階段教室を、どうせ改装するならTEDトークのような本格的なプレゼンテーションができる空間にしようと、小ホールや舞台としての発表・表現の設備を加え、初代校長の名を冠した『Pierre Robert Hall』を完成させました。ここでプレゼン技術を高めた生徒がTED 浜松というイベントに参加し、大人たちのなかでも見劣りしない、みごとなプレゼンを見せてくれました」と星野先生。

筆者も昨年9月の「21stCEO セミナー」の折にこの舞台で本格的なスポットライトや見上げる観客席からの視線のなか、ふだんとは違った緊張感のなかで、貴重なプレゼン体験をさせていただきました。

さらに同校の教育環境の整備は歩みを止めず、今年2月には、デジタル工房『BIGIRION GARAGE』を完成させました。

「この『BIGIRION』とは、『美術・技術・理科・音楽』の頭文字を冠した、多種多様な活動拠点という意味で、生徒は早速、校内放送や各種のミーティング、ものづくりにこの施設を活用しています」と星野先生は、この新たな施設の今後の発展的な活用に期待を寄せています。

写真から想像できるように、まさに圧巻の施設。

「たとえば『team Lab』のように、この空間から生徒の新しい発想や企画が生まれてくる予感がします。巨大なスクリーンには、すでに勝手な(=自



今年 2020 年 2 月に完成したデジタル工房『BIGIRION GARAGE』。「美術・技術・理科・音楽」の頭文字を冠した多種多様な活動や創造の拠点という意味で、すでに在校生は自由に利用して活気ある空間になっているという！

由な)映像や動画が映し出され、見る度に新鮮ですね」と笑います。

続いて今年 3 月には、新体育館『Trinity arena』完成。また生徒の自由な活動空間が広がりました。

先行きは寮やその他の施設の改装予定もあり、静岡聖光学院の生徒が自らの自由な発想で、「主体的に」活動し、成長するための環境づくりが進化していきます。

それにしても、こうして短い期間に、急速に学習プログラムと学習環境を整えつつある同校では、先生方の役割も増え、多忙になることが想定できます。この課題を同校はどうやってクリアしてきたのでしょうか。

「教員に限らず、仕事に満足要因と不満要因があるとすれば、やる気ある組織づくりのためには、たとえ不満を解消してもやる気は引き出せないという考えから、本校では前者の満足要因のマネージメントに注力してきました。

とくに気をつけたことは、まずひとつめが『承認』です。ふたつめは『仕事そのもの』への評価です。そして『3本目の柱』探しに私自身は力を入れるようにしました。『3本目の柱』とは、『教科指導』の力、『生徒指導』の力に加えて、個々の先生の『特長』を生かしてもらおうことです。私はこれを、各先生方の『一目置かれポイント』と呼んでいます。先ほど紹介した

SCL(図書室)の『店長』を務める理科の教員がいい例ですよ。

生徒だって、それぞれの先生のすごいところ(=特長)は日頃から感じていますし、その点には一目置いて(=尊敬して)いるものです。誰でも、そんな先生に出会ったことがあるのではないのでしょうか。

そうした個々の先生の『特長』を生かしてもらえるよう満足要因のマネージメントがうまくいくと、個々の力のアベレージを超えて各先生が持てる能力をフルに発揮してくれるようになります。そんな学校=組織づくりをめざして、いま全員で努力しているところです」

## 新型コロナウイルス対策の休校を機に、新たな学校教育のあり方を模索し、予測不可能な未来に対応できる力を育てる！

ところで、いま世界中の脅威となっている新型コロナウイルス対策のため、全国の小・中・高の休校要請が打ち出され、2月末から新年度に向けて、全国の学校現場と先生方は大変な苦労を余儀なくされていますが、静岡聖光学院では、いち早く休校に踏み切ると同時に、自宅で過ごす生徒とのオンラインでのやり取りに切り替え、同校の先生方は、その内容や手法を日々



在校生の芸術・創造的な作品の発信にも『BIGIRION GARAGE』の設備が積極的に活用されている！

コロナウィルスの対策として、何より重視したのは、生徒とご家族の安全を確保することです。ですので、迷わず全校休校の決断をいち早くしました。

本校では以前からICT機器を活用した教育に力を入れてきましたので、オンラインでのやり取りにシフトしやすかった面もあります」と星野先生。

全校生徒の約3割の生徒が暮らす寮もいったん閉鎖して、全校生徒をそれぞれの家庭に返し、その一方で、登校できない環境で、学校は何ができるかを全教員で集中して考え、準備し、実際にスタートさせました。

「本校はこうした目の前の課題に、事務職員も全員が一体になって取り組んでくれる風土と伝統があり、それで大いに助かりました。インターネットを通じて各家庭にいる生徒とのやり取りのための環境づくりには、それを得意とする事務職員も、教員とともに力を発揮してくれました」と星野先生は述懐します。

そういえば、静岡聖光学院が、同校独自の「思考コード」を作り上げたときにも、教員だけではなく、事務職員も含めた教職員全員で考え、アイデアを募ったと聞いたことが思い出されました。

「いまでも教職員は毎日、生徒とのやり取りを工夫し続けています。一刻も早く事態が収束に向かい、通常の学校生活が取り戻せることを願っていますが、これもまだ世界中で予測不可能な状況です。だからこそ、いま学校は何ができるか、必死に考え、工夫すべき機会だと受け止めています」と星野先生は考えています。

「先生方に最初にお願ひしたのは、インターネット（＝オンライン）を使って、できる限り『学校を再現してほしい』ということでした。だから本校では『オンラ

ッシュアップしています。その試みは、すでに新聞やテレビでも紹介されました。

「時期的に風邪やインフルエンザで学校を休む生徒が増えていた時期で、もう少しで全校休校の決断を迫られている時期でもありました。新型コ

ロナウィルスの対策として、何より重視したのは、生徒とご家族の安全を確保することです。ですので、迷わず全校休校の決断をいち早くしました。

本校では以前からICT機器を活用した教育に力を入れてきましたので、オンラインでのやり取りにシフトしやすかった面もあります」と星野先生。

全校生徒の約3割の生徒が暮らす寮もいったん閉鎖して、全校生徒をそれぞれの家庭に返し、その一方で、登校できない環境で、学校は何ができるかを全教員で集中して考え、準備し、実際にスタートさせました。

「本校はこうした目の前の課題に、事務職員も全員が一体になって取り組んでくれる風土と伝統があり、それで大いに助かりました。インターネットを通じて各家庭にいる生徒とのやり取りのための環境づくりには、それを得意とする事務職員も、教員とともに力を発揮してくれました」と星野先生は述懐します。

そういえば、静岡聖光学院が、同校独自の「思考コード」を作り上げたときにも、教員だけではなく、事務職員も含めた教職員全員で考え、アイデアを募ったと聞いたことが思い出されました。

「いまでも教職員は毎日、生徒とのやり取りを工夫し続けています。一刻も早く事態が収束に向かい、通常の学校生活が取り戻せることを願っていますが、これもまだ世界中で予測不可能な状況です。だからこそ、いま学校は何ができるか、必死に考え、工夫すべき機会だと受け止めています」と星野先生は考えています。

「先生方に最初にお願ひしたのは、インターネット（＝オンライン）を使って、できる限り『学校を再現してほ

い授業』だけでなく、『オンラインでのホームルーム』も行っています。『Zoom』を使って、担任するクラスの生徒の表情を見ることで、生徒の健康状態も推し量ることができますし、生徒の声も受け取ることができます。最近では、この間の先生を労うメッセージをくれる生徒もいるようです（笑）。自宅で運動不足にならないよう、ストレッチの方法や、かつて流行した『ピリーズブートキャンプ』的なエクササイズをオンラインで生徒に伝えている体育の教員もいます」と星野先生。

すでに世界中で、学校ばかりでなく経済活動を未曾有の危機に陥れている新型コロナウィルスの感染拡大ですが、こうした時期に生徒の安全を確保すると同時に、この時期だからこそ学校に何ができるか、その役割や可能性を改めて考え、先につながる新たな教育の可能性を見出そうとする学校に、今後、小学生の保護者の注目と期待が集まることも予想されます。

そして現段階(本記事の原稿作成の3/23時点)では、世界的な鎖国ともいえる状態にあって、新年度の無事な学校再開の見通しが立っているとはいえません。

この時期、これからの学校教育のあり方を模索する静岡聖光学院のような柔軟な私立学校が、この時期に考えた遠隔教育の工夫と、蓄えたノウハウとエネルギーをもとに、やがて学校再開時には、「生徒と先生が一同に集まれる機会」にあらためて感謝し、その場を尊重し、生徒のいっそうの成長の場として生かすことができれば、日本の学校教育はさらに「進化」していくことも期待できるのではないのでしょうか。

「本校ではそう信じて、教員が一丸となって考え、工夫を重ねています。こうした危機的な状況にあって、予測不可能な未来に生きる力を育て、社会にも貢献できる人間力を育てる。それが本校の掲げたミッションでもあると考えています」と星野先生。

静岡聖光学院のそうした“進化”が、日本の学校教育にも新たな希望を与えてくれる予感がします。



すでに新型コロナウィルス感染拡大防止のための休校に入っていた3月17日(火)に『Zoom』によるオンラインでのインタビュー取材に応じてくれた星野明宏先生。

(※今回の記事は、2020年3月2日に首都圏模試センターが開催予定していた「学校向けセミナー」を新型コロナウィルス対策により中止し、代わりに動画ライブ配信を行った際の、星野先生による「教育の転機 2020年に劇的な進化を遂げる静岡聖光学院の『21世紀型教育』とは？」の講演内容に加え、『Zoom』による遠隔取材による、この間の静岡聖光学院の休校対策等についての追加インタビューをもとに構成しています)